

新体操第23回全日本選手権大会 兼第5回新体操世界選手権大会第一次予選 (女子の部)に関する一考察

佐藤 た け

新体操第23回全日本選手権大会、兼第5回新体操世界選手権大会第一次予選は、群馬県高崎市体育館において、晩秋の昭和46年11月7,8日の両日に亘って行なわれた。

新体操の競技大会は、全国高校生を対象としたもの、全国学生を対象としたもの、国体においては、各ブロック代表の高校生、そして全日本選手権大会が、高校生、学生、一般と、自由に参加出来るように考えられた大会である。

幅広い参加である故に、年令の層も厚く、この大会の「ねらい」と「意義」を知ることが出来るのである。

新体操を愛するもの、新体操に感心のあるもの、体育専門家で、過去の団体徒手体操を踏えて、発展する新体操に憧れと情熱とを持っておられる人々が、北から南から参集され、大会の「ねらい」と「意義」を把握し、そして自からの研修の糧に……と、懸命であることを感知されるのである。

こうしたムードの中で、私もその一人として、真剣にこの大会を考察し、日本の若き女性の明日への発展のために、いささかなりとも寄与したい思う。

I

1969年秋、ブルガリアにおいて行なわれた第4回新体操世界選手権大会に、日本が、初出場したことは周知のところであろう。

この大会の競技種目は、団体種目と個人種目の二種目で、日本の団体種目選手（大谷、狩野姉妹、小林、川向、中島）チームは、参加国¹⁾の1/3の栄冠、5位に入賞した。この事実は、この種目に精進する日本の若い女性達に、誇りと自信を与え、勇気をもたらす要因になったと見て、あやまちではなからう。

「世界にいどむ」日本選手が、コンプレックスを感じない点は、プロポーションに自信の持てないことであろうが、この点も、合理的なトレーニングによって、克服出来ることを、初出場の選手達は悟ったことであろう。

今回の全日本新体操選手権大会参加選手（女子）²⁾のプロポーションは、昨年比して、美しさを増していることは、会場に参集された多くの人々が等しく感じたことではないだろうか。特に美しさが身につけて来ている選手の多くは、高校生の選手であったこともまた参集された人々の眼に映じたのではないだろうか。

高校時代の女性の多くは、自らのプロポーションに対して、きびしく真面目に悩み、真剣に矯正につとめ、指導者の助言に対しても、素直に耳を傾け、自立的にプロポーションづくりに努力を続ける、その賜であると思われる。もちろん指導者の合理的、計画的、持

1) ブルガリア・バルナ市での第4回世界選手権大会参加国は18カ国、そのうち団体種目は15カ国が参加。

2) 世界選手権大会は女子のみであるが、日本では、男子・女子共に実施されている。

続的な愛情深い真剣な指導があずかって力あるものとも思われる。

指導者、トレーナー等の力量はいかに大切であるかは、改めて申すにおよばないことであるが、より以上に必要であり大切であることは、自主的に、自らのプロポーションをつくる努力で、トレーニングの時間中はいうまでもないが、それ以外の時間のすべて、要するに日常生活の中において、自らの努力で、自らのプロポーションを、美しく築きあげてゆくことこそ、忘れてはならない重要なことである。

高校時代の女性は年令的にも「美」を求めて止まない、美しさに憧れを持ち、純粋な心で自らを見つめ、あらゆる角度から美の追求に余念なく、自らのプロポーションに対してもきびしく、友人の注意も素直に受け入れ合ってゆける生活態度が確立されているのであろう。

新体操を愛し、新体操を究明する若い女性のことごとくが、素直に、きびしく、自からのプロポーションづくりの重要性を自覚し努力されることを望みたい。

II

前年度に比して、参加選手の増員を私は喜ぶたい³⁾。日本が「世界にいどんだ」その歴史と実績が、誇りと自信と勇気を与え、選手各位に憧れを持たせたのであると、見てよかろう。

今回のこの大会のムードは、かつて感じたことのない、意欲的で女性らしい、美しさをにじみ出したもので、希望に輝く憧れのムードであったと見られる。

世界と肩をならべる夢、その夢がかもし出したムードと、感じられたのである。

第5回新体操世界選手権大会第一次予選という大会の目的が、このすばらしい新鮮なムードをかもし出したことは、うたごう余地もない。若いエネルギーは「世界にいどむ」エネルギーとして燃えあがったのであろう。

団体種目の優勝は東京女子体育大学チームが獲得し、第二位は群馬の一般チーム（高女クラブ）、第三位は秋田北高校チームが獲得した。

厳正な審判のもとに決定されたこの順位は、動かすべからざる事実ではあるが、この中で、第三位を獲得した秋田北高校チームの演技の素直さ、美しいプロポーション、純朴な人間性、動きの流れとそのテクニクは、県民性を感じさせるに足るもので、且つフレッシュな感覚とチームワークの立派さ……。

演技者のミスに対する審判の処置は当然と見られるが、ミスをカバーしあうあの構成メンバーの人間的つながりと結びつきのゆかしさに、私は強く心を引かれたのである。

チームを構成したメンバーの一人一人が無限の可能性に「いどむ」真剣なトレーニングの積みあげが、一人一人の生命力を結集して、チームの生命力を感じさせる演技を培って来たものではないだろうか。かくして構成されたチームは、人間性豊かな思いやり、励まし合い、競い合い、いたわり合いがあり、語らずして通ずる雰囲気をかもし出したのであろう。

自らを大切に、自らを愛しながら、自らにきびしく、そしてチームメンバーに対しては寛容さと思いやりからにじみ出る温かさの感じられるチーム、互に敬愛と信頼に結ばれたチームである。

ここにはじめて、同じ目的に向って結集された若いエネルギーによって、柔軟性ときび

3) 参加選手数について後述。

しさのあるゆるぎないチーム構成が築かれていったのであろう。

秋田北高校チームには、こうしたチーム構成の重要な要素を人間性を感じられると共に、純粹さと、ゆかしさと、若さを持っている点は、あの70年の歴史と伝統を誇る校風からにじみ出るものと、私は受けとめられる。

なお秋田県は「体操秋田」の建設に向っての努力をおしみなくなされていると見られる。幅広い年齢層に向って、男女の別なく、体操教室が設けられ、トレーニングが実施されているのだ。

無限の可能性に向って、体育教育者（男女）が一丸となって綿密な企画のもとに、動きの真理を追究しつつ、実施されている、この底辺拡充のエネルギーは、近き将来、オリンピック選手が育成されるであろうことを、期待されるのである。

特に女子には「新体操」の基礎づくりに意欲的である実態が、今回の大会出場選手（秋田北高校チーム）の演技にも間接的には、かなり大きく、その「精神」が影響されていると見てもあやまちではなからう。

III

団体種目に出場したチームは、高校3チーム、大学4チーム、一般（高女クラブ）1チームの計8チームに過ぎない、今回の大会が、前会の第22回大会（秋田市）参加11チームより少ないことはなぜなのか……。

I. H. の46チーム参加と比較にならない大会ではあるが、意義深い大会であることはいうまでもない。第5回新体操選手権大会に、期待と意欲を持った、この大会の選手の胸の奥深く秘められた夢が、選手各々の眼に感じられるのであった。

優勝した東京女子体育大学チームの27.575の得点は、第二位の一般チーム（高女クラブ）の得点25.825との差が1.750であり、第三位の秋田北高校チーム得点24.750との差は2.785であった。この3チームの長所、短所を考察することが、この大会の将来の発展に一つの道しるべとなるのではないか、との信念から私なりの考察をし、この道の識見豊かな人々の批判を得られれば、この上ない幸せと思うのである。

この大会の審判法が、国際審判法を使用されたことは躍進であるといえよう。

構成を審判する審判員と、実施および一般印象を審判する審判員との二本建てで、日本において、今回はじめての実施である。

構成……とは、難度と組合せおよび技術価値で、実施および一般印象……とは、競技者の多種多様の形式の技術を現わし、各種の競技の特性を反映する。各種の要素を包含しなければならぬことや、音楽伴奏は、実施する演技の動きや組合せと、よく調和していなければならぬこと、その上に、その演技に活気を与え、競技者の個性および優美さを強調させるものであることが望ましいと日本体操協会体操委員会の、新体操競技採点規則（女子）で、この規則は国際審判規則に通ずるものである。

構成は独創的な創作、純体操的で誇張のない美的要素、難度は6個の難度要素を含まなければならぬ。

器具使用の運動については、その器具の特性を生かした特有のものであること等が示されている。

優勝した東京女子体育大学チームの最も短所とするところは、団体としての重要な要素……

であるところの、チームワークのものたらなさであった。

日頃のトレーニングにおいて、コーチも学生も悩み続けながらも、大切なチームワークのものたらなさを乗り越える結集した努力が欠けていたそのままだが、この大会に如実に現われたといえよう。

選手各々の「人間性のとぼしさ」から来たものではないだろうか。

構成については、独創性をもった創作で、純体操的で誇張のない美しさは、かなり高く評価してよいが、無限の可能性にひたむきに追究する自主的意欲の欠如と見られる。

伴奏音楽は、演技の動きや組合せとよく調和し、その演技に活気を与え、競技者の個性と優美さを強調させるに十分なものであったが、チームワークのとぼしさが、演技中動きの流れを心ゆくばかりに盛りあげる人間的力の欠陥につながったと見られる。

第二次予選（六月）を通過するまでに、この困難な短所をどのように矯正し乗り越えるかが、一人一人の人間性のトレーニングにかかっているのである。

第二位の一般チーム（高女クラブ）は、社会人として、仕事に従事する人々で結成されたチームのため、トレーニングの時間も決して十分ではなかったであろう。然しチームとしての重要要素を踏え、完璧とはいえないが、何んのあせりもない安定感を持ち続けたことは、社会人としての、人間性の豊かさからではなかろうか、週1回か2回のトレーニングで築いたものではなく、職場での人間関係の中において、選手達はチームの一員としての自覚を持った生活態度であったろうことが推測される。

豊かな人間性がゆとりを生み、チームの「根性」となり、つながりと結びつきが温かいものを培ったのだらう、女性らしい優雅さはいい知れない「ゆかしさ」を感じさせる演技として、高く評価するものである。しかしトレーニングの不足のうらみはまぬがれないことを指摘するものである。

第三位の秋田北高校チームは前述の通りで、「体操」秋田の底辺拡充の新体操基礎づくりの上に築かれたチームと見てあやまりではないであろうチームだけに、堅実さと新鮮さがよく調和した、一糸乱れることのないチームワークに、心引かれないものはなかったであろう……。

二年後三年後の「体操秋田」の研究と努力が必ずや、人間性にあふれる県民性豊かな、すぐれた演技者を生み出すであろうことを、期待するものである。

出場チーム全般の力量はたしかに、前年に比して進歩したとみとめるが、なかには、トレーニングの甘さを感じさせるもの、動きのイメージの乏しいもの、動きの流れの不自然さが、リズムカルな動きをはばんでいるもの等で、これ等は動きの追究のとぼしさから来るものである。なお運動の質の見わけの必要性をもまた痛感せざるを得ない。

動きの中における柔軟性こそ重要な要素である新体操としては「運動の深さ」の追究と相俟ってゆかねばならない重要なことである。

IV

次に個人種目についての考察を述べて見よう。

この種目に対する出場選手は前年度秋田市において行なわれた、第22回全日本新体操選手権大会は、種目別に見るに、徒手25名、輪14名、縄11名、合計50名で、個人総合（徒手、輪、縄）の三種目に「いどんだ」選手は9名であった。

この個人種目の競技は、日本における歴史は頗る浅い競技種目だけに、私は大切に見守り、その発展を願うものである。

今回の大会における個人種目への出場選手を種目別に見るに、(今回はボールを加えて四種目)、徒手39名、輪21名、縄21名、ボール20名、合計101名に達した。前回より一種目が加わったために、選手数が増加したと見られるが、個人種目への夢、憧れが大きいと見てよいのではなかろうか、然し個人総合へ「いどむ」選手が前回の9名に対し、今回の11名中「棄権」が5名で、前回より下廻った6名であったことは残念でならない。

個人種目なるが故の気軽さから……とするならば、教育上から大きい問題として、とりあげねばならないと思われる。

選手は高校生50%強を占めているところに注目せずにいられない、技術的な向上はみとめるが、一連の動きの流れのとぼしさ、切断された動きのパターンの、つぎ合せているものが多いこと、また運動の深さの求め方が余りにも貧しいこと、スピート感も節度もとぼしい上に、各々の動きのイメージと連続された体操としての価値の把握がものたりない。

技術的に向上した徒手はやや微笑ましいものを感じたが、手具を使用しての体操についても、全般的にはかなりの進歩を思わせるが、選手個々については、とりあげて「躍進」したと思われるものを見出すことの出来ない寂さを感じたのである。

世界選手権への夢を抱いているその意欲は十分発散はしているものの、運動の深さの追究の甘さや、動きの流れの不自然さが、リズムカルな動きをはばんでいる。こうした要因は「運動の質の見わけ」のとぼしさがもたらすところである。

これらの欠点は団体種目について述べたところでもある。

手具を用いての体操にあつては、手具の特質の把握が大切で、不十分な把握は、手具と体の動きと調和のとれた、よりダイナミックな美しい動きを生み出すことは困難であることを知らねばならない。

一連の体操として独創的な創作でなければならないこの新体操においては、特に手具と体の一体化が重要な要素で、これこそ無限の万能性拡張の基盤といえよう。ここに立脚した、合理的な持続的トレーニングを忘れてはならないのではなかろうか。

個人種目の選手達が、全般的に見てプロポーションが、かなり美しくなったように思われる、然し激しい動きの中において、より柔軟性と優美さと優雅さをかもし出さねばならないのではなかろうか。

脊柱の柔軟性は申すにおよばないが、脚の心よいまでの敏活さと弾性との調和をマスターすることは、必要欠くべからざる重要なトレーニング要素である。

個人種目の選手は、自主的にトレーニングが出来るという特点がある故に、トレーナーの指導計画と自主的なトレーニング計画とをにらみ合せ、綿密、且つ合理的な企画に基づいて、「自らにきびしく」励むことは、団体種目とは違ったトレーニングを行なうことが可能であろう。

日毎に「自らにいどむ」心掛けと、努力を忘れてはならないのだ。自らをきわめてこそ困難を克服し、個性豊かな独創的創作を生み出すのである、ここに無限の可能性の拡張も望めるといえよう。

個人総合に「いどんだ」6名の選手についての考察を端的に述べることは、これからの発展に寄与するものと信じ、得点を明らかに示して、見たまま、感じたままを建設的にし

るしてみよう。

得点一覧表は次の通りである。

得点表（個人総合）

選手名	徒手	縄	輪	ボール	合計得点	順位
小林 衣代	9.15	9.45	9.35	9.30	37.25	1
川向 妙子	9.25	9.20	8.85	9.35	36.65	2
五明 みさ子	9.10	9.20	9.05	9.25	36.60	3
福富 たか子	9.10	9.15	8.75	9.15	36.15	4
池谷	8.50	8.80	7.20	8.60	33.10	5
鈴木 とも子	8.25	7.95	8.25	7.85	32.30	6

尊敬と信頼のもとに厳正な審判の採点された結果であることを明らかにして置きたい。

東京女子体育大学選手（上位4名）については、その力量において大差はない、然しいずれも神経質なために、試合に臨んで精神的安定を欠くうらみを指摘せざるを得ない。

繊細な神経の持ち主が故に、繊細な動きや、運動の質の見わけも、動きの深さの追究も鋭どく、且つ動きのイメージもリズムカルな動きもかなりのところまでこなし、作品のムードをも、かもし出すことが比較的出来ていたと思われるが、観衆の心にくい入る力の乏しさを感じないわけにはゆかない。

なかに唯一人、試合に強い定評の選手は試合中安定感を示す……という、特別なトレーニングを行なうわけでもなく、他の選手と全く同じトレーニングである。

然し日常の生活態度を考察するに、神経質と見られるところもなく、明朗さを持っており、勇気がある、こうした人間性が試合に臨んで、自分の力量を勇敢に、心ゆくばかり発揮させ得るものであろう、実に全魂を傾注した演技である、繊細さは乏しいが、个性的で若さと情熱に満ちた演技はそれなりに観衆に訴える力を持っている、他の選手は謙虚に学びとらねばならない点ではないだろうか。

東京女子体育大学の新体操はコーチを他に求める必要もなく、恵まれた環境にあることは自他共に認めるところであるが故に、選手達は不意識的に、甘えと依頼心があってか、自主性に欠けていると見られる、独創的創作の意欲も乏しいのに気づかないのではなかろうか、この甘さが、試合に臨んで、精神状態のバランスを失ない、演技に安定感を欠く恐れが生ずるものと、私は見る。

自主的に絶え間ない努力なくして、無限の可能性の拡張は望めないことである。若い力こそは無限の可能性を信じ、これに向って、励み合い、競い合ってゆく情熱とファイトを望みたいのである。

「試合は勝たねばならない」、この栄冠は努力なくしては得られるものではない、栄冠への諸条件を一つずつ、自からの努力によって培かってゆかねばならないのだ、努力なくして望むことは冒険である。

「天才は努力によって生れる」と言われる、と私は幼い頃から母にいきかされた、この教へを信じている。「世界にいどむ」日本民族の代表選手候補として、真剣に自からに

問いたださねばならない、そして「なすべきこと」のすべてに向って、大いなる努力をおしんではないのだ。

「動き」の真理の追究、個性豊かな独創的創作、日本の民族性あふるるテクニックを身につける努力によって、培われてゆく人間性が「試合」に望んで、その価値が評価されるのである。

「人間性の欠如」はいかなる才能によっても補うことは出来ない……。と言われるが、実に頭のさがる名言ではないだろうか。

大会の成績は厳正な審判の示した通りではあるが、豊かな情操と寛容な態度と、謙虚で勇敢な精神の安定度が、いかに競技を左右するかを知らねばならない。

リズムカルな運動は精神上の安定に極めて重大な要素をもっていることを忘れることは出来ないであろう。

動きがリズムカルに行なわれていないと言うことは精神状態そのものが不調和をきたすことである。

今回の大会において精神的な安定がいかに重要であるかを体験したことであり、今後のトレーニングにあたって、人間性を豊かに培ってゆくためへの最大の努力を払うべきではなかろうか。

日本民族、しかもこれからの日本の「にない手」である若き女性の生命の力を代表することを自覚せねばならないのだ、と私は考え、あえて苦言を呈さずにはおられない。

潤いある豊かな人間性……は他人に与えられるのではなく、自からの努力によってのみ培われるのである。

美は力であり動きであり生命であると、私は信じている。

世界選手権は技を競うと共に、民族の持つ人間性、民族の生命力を競い合う「場」であると私は受けとめるが故に、世界選手候補者に苦言を呈して、いささかなりとも自からを見つめる時の糧にされることを望む。

V

個人種目出場選手の棄権率の増加する現状を見のがすことは、教育上重要な問題として、簡単に許してはならない。

「自分の自由だ……」ということであろう人が、今回の大会参加選手は大学、高校での教育を受けているものである。教育の場は技術のみの教育ではないはずだ。人間形成という重要な役割を果さねばならない「場」である。この重要な場において、あらゆるトレーニングがなされて、その場から送り出された代表選手であるにもかかわらず、その行動は全く「個人」の自由意志によって、人と人とのつながりを忘却し、「棄権」という重大なことを、気軽にこともなく行なっている現実に直面したのである。

「試合は勝たねばならない」という重要な要素はあるが、試合は技術を通して、人間性を、生命力を、いかに競い合うところに、意義が存在するのである。個々の事情はあろうが、余りにも多数の棄権は大会の意義を踏みにじるにも等しい行為として見ざるを得ない。「人間性」を育成する教育の欠如が要因しているのではないだろうか……。

動きの真理の追究も、優雅で審美的な印象を与える独創的な創作も、終局は人間の生命の在り方なのである、人間性こそは、演技に生命を与えるのである。

選手を育て送り出す「教育の場」にある私は、この現実に直面して、「教育」への厳粛な鞭を与えられた……と受けとめたい。しかし選手のみを責める気にはどうしてもなれない。その前に教育の場における「人間形成」の目標を明確に樹立しこれに向っての努力を学生と教師と共になすべきである。

21世紀創造の若人を尊重し、信頼しつつ教師自らの姿勢を正すチャンスを与えられたと、教育上重要な課題と考察したのである。

参 考 文 献

- 舞踊のいのち： 渡辺俊男著
 リズム体操： ルドルフボーデ著 万沢遼訳.
 ソビエットの芸術体操： B. ソビノフ著 三宅，稲垣訳.
 貴重なる生命と愛： 武内寿美子著.
 高校生の倫理： 田中悦平著.
 若き世代へ： 田中悦平著.
 舞踊美学： 小林信次著.
 創造性を育てる学習課程： 香川大学付小著.
 創造性とインスピレーション： ヤ，ア，ポノマ，リョフ著. 加藤幸広訳.
 夢から発見へ： ハンス，セリエ著. 多田井吉之介訳.
 美しきプロポーション： 池上金治著.
 創作ダンス入門： J. ウイナーズ著. 五十嵐典子，林悦子訳.
 身体の動きによる表現： 水谷光，三浦弓枝著.
 創造性の開発： I. ランドウンスカヤ著. 松川秀郎訳.
 新体操競技規則
 新体操競技採点規則
 新体操女子団体体操
 自由種目難度要素
 新体操団体体操規定演技
- } 日本体操協会体操委員会